

途上国の産業開発と日本の経験 ～翻訳的適応から国際協力を考える～

2025年12月11日 大野 泉
政策研究大学院大学／JICA緒方研究所SRA

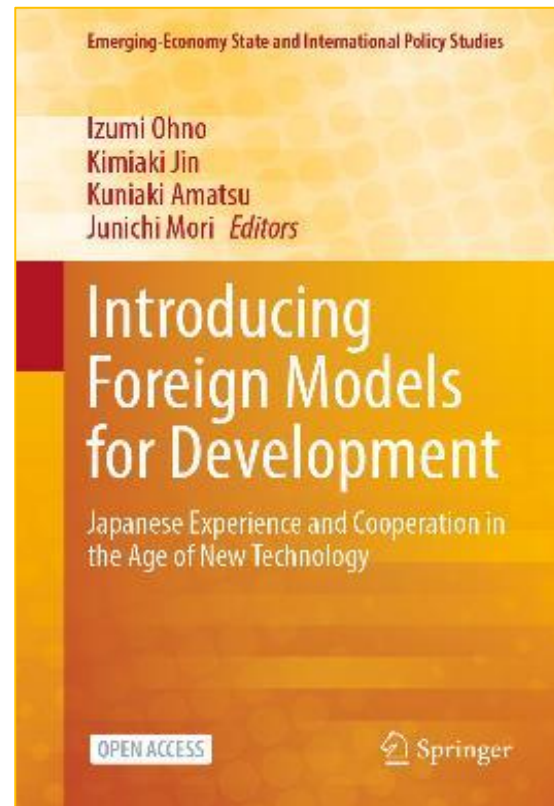


私たちの研究と出版物

JICA緒方研究所「日本の産業開発と開発協力の経験：翻訳的適応プロセスの分析」プロジェクト

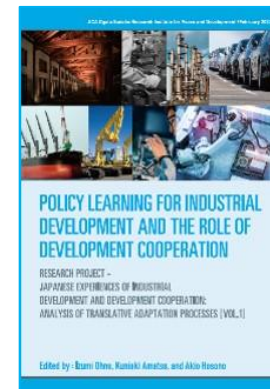


『途上国の産業開発と日本の経験』
大野泉・神公明・天津邦明・森純一
(編者)
(日本評論社2025)

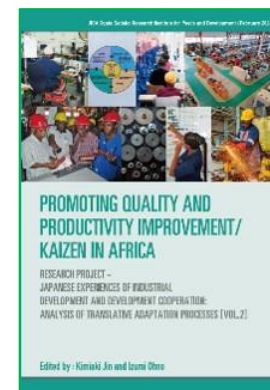


『Introducing Foreign Models for Development』
Eds. I. Ohno, K. Jin, K. Amatsu & J. Mori
Springer 2024

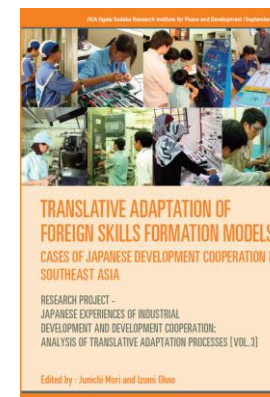
テーマ別の事例分析
産業政策、品質・生産性向上、産業人材育成



Policy Learning for Industrial Development and the Role of Development Cooperation
(Eds. I. Ohno, K. Amatsu & A. Hosono, 2022)



Promoting Quality and Productivity Improvement/ *Kaizen* in Africa
(Eds. K. Jin & I. Ohno, 2022)



Translative Adaptation of Foreign Skills Formation Models: Cases of Japanese Development Cooperation in Southeast Asia
(Eds. J. Mori & I. Ohno, 2024)

本書のねらい

- 日本発の知的貢献のあり方を考える
- 「開発を学ぶ、伝える」方法への着目
 - ⇒ 鍵概念としての翻訳的適応
 - ⇒ 産業政策・産業開発協力における日本の経験に焦点
- 変化する国際開発協力と「成熟したパートナー」としての日本の役割
- 学際的な分析視点／研究と実践の架橋

開発のための知識・学習
(開発経済学)

内発的な学習・知識創造

+

翻訳的適応
(文化人類学)

開発協力
の役割

知識を受容する側の内在的な視点
グローバル統合とのダイナミックな相互作用

開発における中心テーマとしての知識・学習

- ❑ 外国から先進技術・知識を学び、自国にあった内容で人材・企業・社会に定着させることは、工業化を通じたキャッチアップをめざす国々にとって不可欠。

- *Central focus of development policy should be closing a gap in knowledge.*
- *Development entails learning how to learn.*
- *A critical aspect of 'learning' is that it takes place locally.*

Stiglitz & Greenwald (2014), *Creating a Learning Society: A New Approach to Growth, Development, and Social Progress*

- ❑ 技術革新により、今日の途上国は外国知識に容易にアクセスできる。しかし、「ベストプラクティス」から選択的に学び、ローカライズして自国モデルを構築するためには、「**学ぶ側**」はその**方法(HOW)**について学習する必要あり。

知識・学習の重要性(続)

- ❑ 開発にとり重要なのは、何の政策を打ち出すか(WHAT)よりも、世界ほぼ共通の政策メニューをどれくらい自国にあうように企画・実施できるか(HOW)、である。
- ❑ 例えば、産業政策の構成要素は各国でそれほど違わない。
教育訓練、企業-TVETリンケージ、輸出振興、優先業種・製品の支援、品質・生産性向上、中小企業支援、外資誘致、工業団地、外資-現地企業リンケージ、スタートアップ支援、等々
- ❑ 開発パートナーや国際機関(「伝える側」)は、途上国に何をすべきか(WHAT)を勧告するだけでなく、効果的な政策のつくり方(HOW)を助けるべきである。
- ❑ しかし、産業政策の立案と学習のしかたに関する(HOW)の研究は限られている。日本の開発・開発協力の経験は実践に根差すが、その理論化や国際比較はいまだ限られている(例えば、[野中郁次郎\(2024\)](#)、[細野昭雄\(2025\)](#))。

「開発を学ぶ、伝える」：日本の知的貢献の可能性

- ❑ 日本は自らのキャッチアップを通じ、「学ぶ側」としての経験を蓄積。さらに長年の途上国への開発協力を通じて、「伝える側」としても豊富な経験をもち、相手国において人材育成や人脈構築をしてきた。この意味で、日本は、「開発を学ぶ、伝える」HOWについて、ユニークな視点と経験を涵養してきたはずである。それは何か？
- ❑ 近年は、多様なアクターが知識協力を実施。先進国、新興国を問わず、自らの開発経験やノウハウを積極的に発信する国が増えている。
- ❑ 国際開発の環境が大きく変わってきている今、日本は自らの比較優位を認識し、「成熟したドナー／開発のパートナー」として、開発への知的貢献のあり方を真剣に考えるべきではないか。

なぜ、産業開発・開発協力に焦点をあてるか

- ❑ 工業化は経済成長と構造転換を牽引し、雇用や技術蓄積を通じて包摂的・持続可能な発展の基盤を築く。製造業は、サービス化やDX・AIの時代においても依然として重要。
- ❑ 東アジアの工業化経験は、「学習の地域連鎖」の重要性を示唆している(Vogel 1991)。
- ❑ 日本は途上国に対して、政策支援から個々の施策の実行、官民協力にいたる多岐にわたる産業開発協力を行ってきた。また、日本の協力には実体経済や個別産業への着目、現場に根差した支援などの特徴がある。(⇒翻訳的適応プロセスとどのように関係づけられるか?)
- ❑ 近年のデジタル化や気候変動、コロナ禍をへた経済再構築、地政学的リスクの高まりにより、工業化のあり方自体が変容しており、新たな視座からの再検討が求められている。

書籍の構成・内容 （日本の産業開発・開発協力の研究と実践で豊富な経験をもつ10名が編著者）

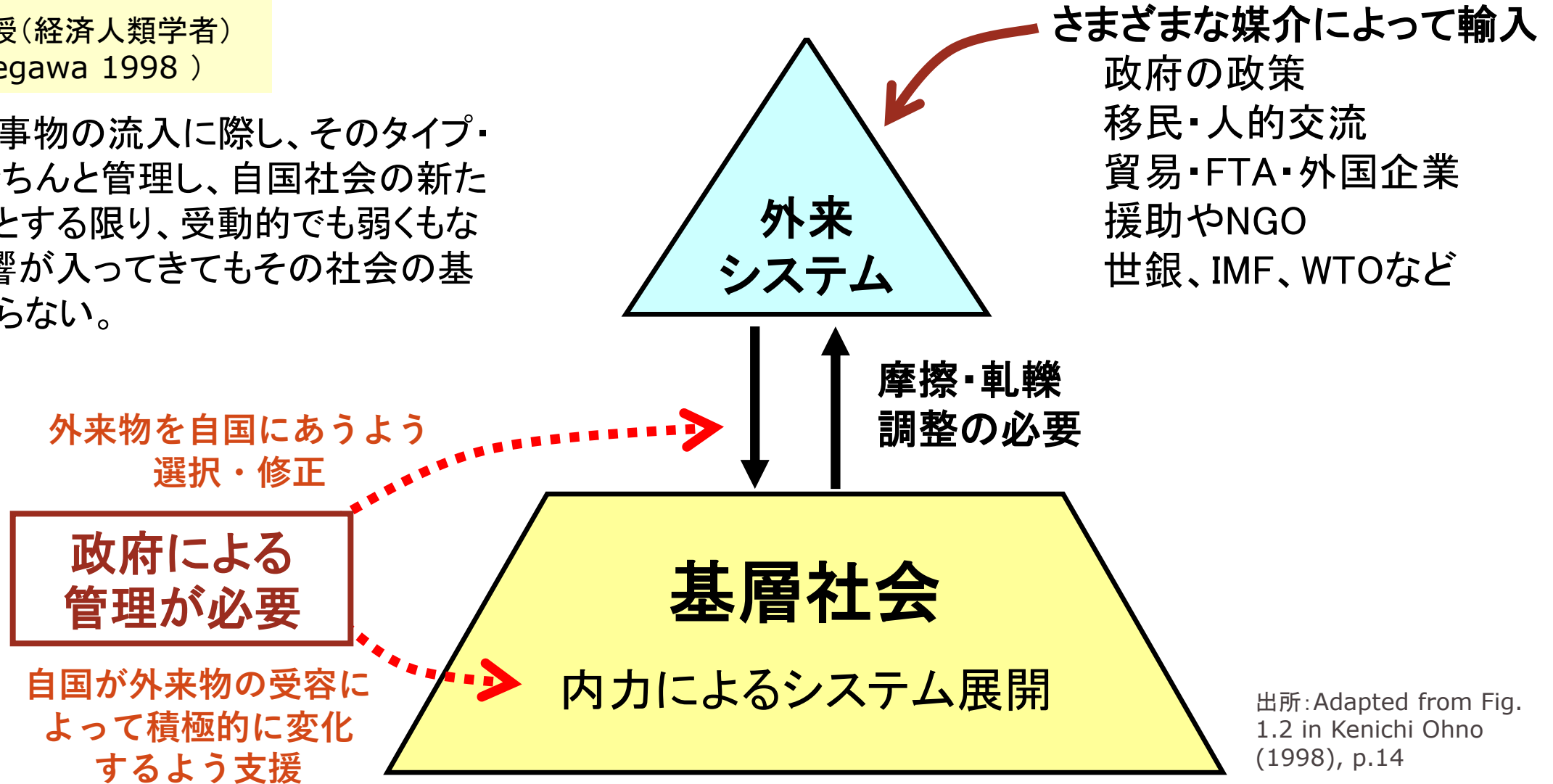
第I部 総論――開発プロセスにおける翻訳的適応とは		
序章	日本発で未来の開発協力を考える	大野 泉
1章	開発を学ぶ、伝える： 翻訳的適応からみた日本の産業開発と開発協力の経験	大野 泉
2章	学習・革新・構造転換のための産業政策： 日本と諸外国の経験	細野昭雄
第II部 日本の経験――どのように開発を学んだか		
3章	国家の工業化ビジョン： 明治政府の学習プロセス	天津邦明
4章	官民連携による技術導入： 戦後日本の産業政策	和田正武
5章	品質・生産性向上： 日本とシンガポールの国民運動	大野 泉
第III部 途上国とつくる開発協力――どのように開発を伝えてきたか		
6章	産業政策対話： 途上国との知的協力	大野健一、細野昭雄、天津邦明、山田 実
7章	産業界と連携した職業教育訓練と開発協力： ベトナムでの成果と課題	森 純一
8章	日本のものづくりを内在化する： タイ主体の技術振興と技術教育	大野 泉、森 純一
9章	アフリカにカイゼンを広める： 技術協力における翻訳的適応の実践	神 公明
10章	カイゼン・プロジェクト支援の10年： チュニジアとエチオピアの比較	菊池 剛
第IV部 変化する世界と翻訳的適応アプローチ――何を維持し、革新すべきか		
11章	工業化の新潮流： 途上国と共創する未来の産業開発協力	本間 徹
終章	共創の時代の翻訳的適応： 日本の開発協力の高度化に向けて	神 公明、大野 泉、森 純一、天津邦明

翻訳的適応：外来物を自国にあうよう選択・修正

前川啓治

筑波大学名誉教授(経済人類学者)
(前川1994、Maegawa 1998)

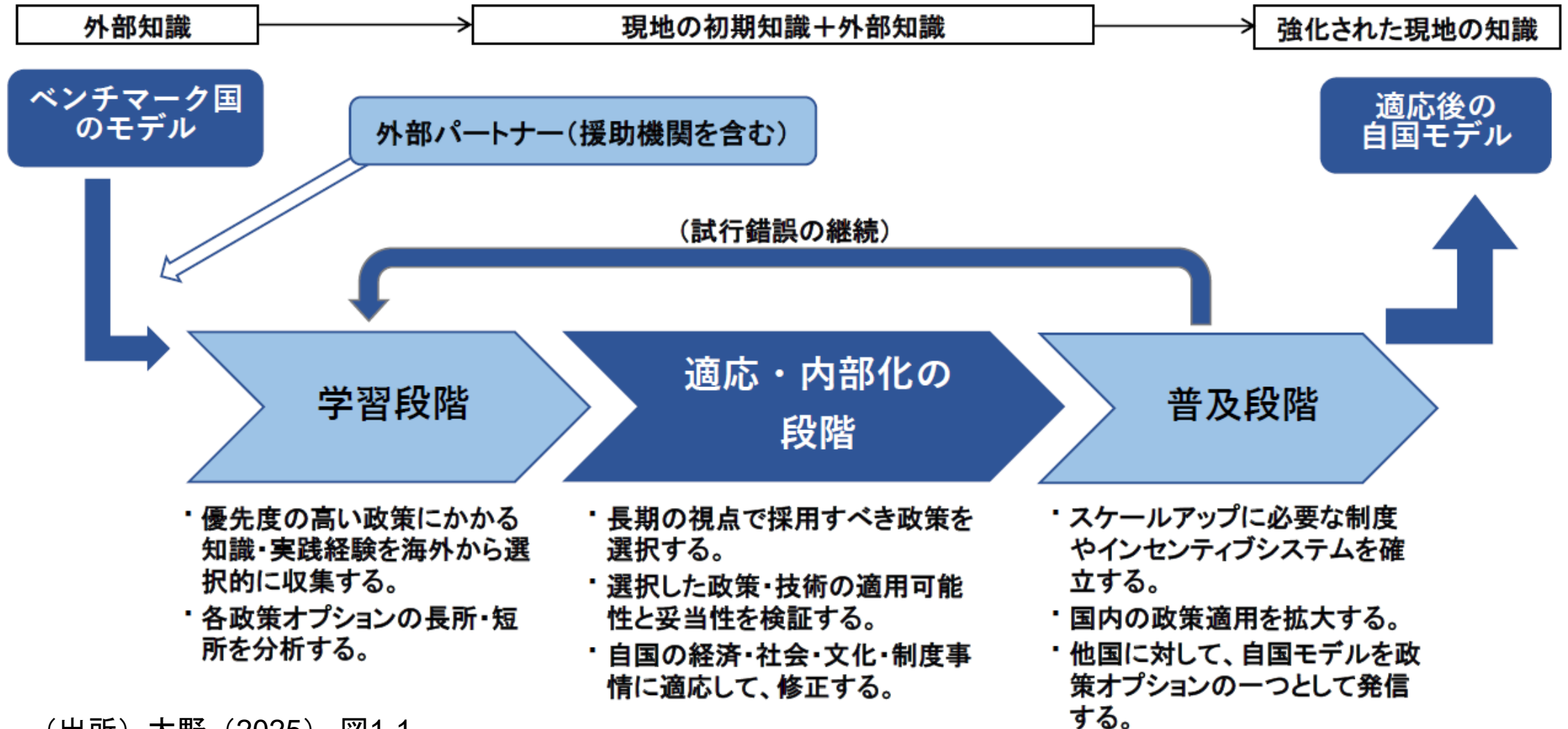
後発国は外来事物の流入に際し、そのタイプ・条件・速度をきちんと管理し、自国社会の新たな成長の刺激とする限り、受動的でも弱くもない。外国の影響が入ってきてもその社会の基本構造は変わらない。



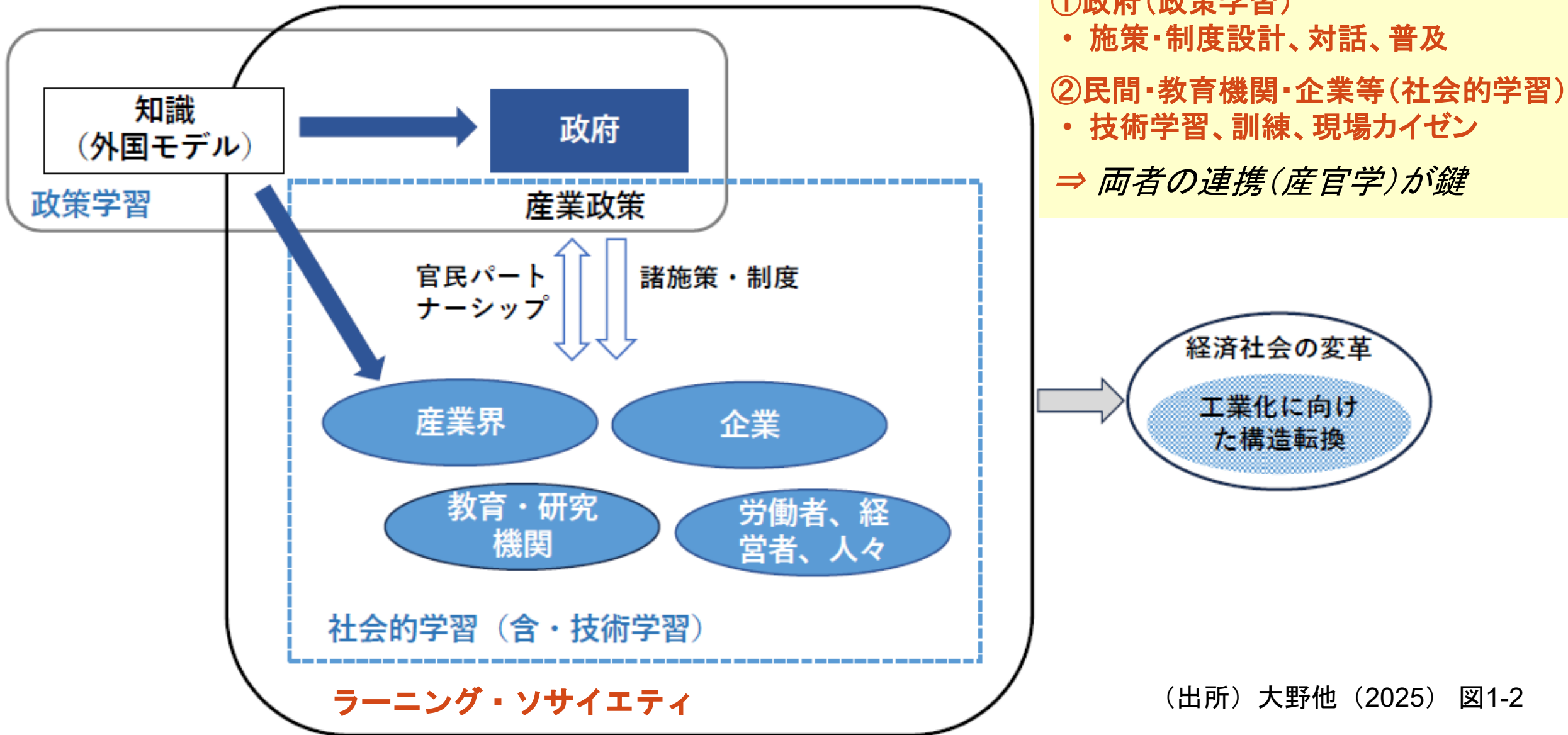
出所: Adapted from Fig.
1.2 in Kenichi Ohno
(1998), p.14

翻訳的適応と内発的学習の三段階プロセス

- ・キャッチアップをめざす後発国が外来知識・技術を学習、適応、普及拡大していく内部メカニズムやプロセスに着目
- ・各国・社会の固有性の尊重、国全体の主体性、プロセス重視(試行錯誤)が重要要素



内発的学習を考える二つの軸、政府の役割



事例分析の視点、主な問題意識

- 外国の経済発展モデルを効果的に学び、自国に合った内容・形に適用するにはどうすればよいのか？
- そのような学習は、異なる特徴をもつ国・政府や社会においてどのように始まるのか？
- 結果に影響を及ぼす主要因は何か？ 翻訳的適応と内発的学習のプロセスで政府が果たすべき役割は何か？
- このプロセスを促進するために、開発協力が果たす役割は何か？
- SDGsとデジタル化の時代において、この学習方法は有効か？ 見直すべき点、また維持すべき点があるとしたら何か？

分野 \ 視点	日本の経験 (開発を学ぶ)	途上国との協力 (開発を伝える)	変化する世界の中 での翻訳的適応
①産業政策 【2章】 学習・革新・構造転換のための産業政策 (日本、韓国、マレーシア、ブラジル) 【3章】 明治政府の学習プロセス (国家の工業化ビジョン) 【4章】 戦後日本の産業政策 (官民連携による技術導入) 【6章】 産業政策対話 (途上国との知的協力)	○ ○ ○	○	
②品質・生産性向上 (カイゼン) 【5章】 日本とシンガポールの国民運動 【9章】 アフリカへのカイゼン普及 【10章】 チュニジアとエチオピアへのカイゼン支援	○	○ ○ ○	
③産業人材育成 【7章】 ベトナムでの産業界と連携した職業教育訓練 【8章】 タイでの日本式ものづくり技術振興と技術教育		○ ○	
④変化する世界と翻訳的適応アプローチ 【11章】 工業化の新潮流、未来の産業開発協力 【終章】 共創の時代の翻訳的適応		○	○ ○

産業政策の策定・実施における翻訳的適応

産業政策の構成要素と 策定・実施プロセス

ビジョン

戦略

政策措置

官民パートナーシップ

産業政策の領域（2章参照）

国内市場

輸出振興

FDI誘致

GVC 参
加

教育、訓練、
産業人材育成

企業の能力
強化

技術とイノ
ベーション

ファイナ
ンス

インフラ

TVET

カイゼン

外来システム、
ベンチマーク国
のモデル

翻訳的適応

基層社会

学習段階

適応・内部化段階

普及段階

本書の内容(各章のポイント)

「総論・理論編」

- 序章・1章——本書の問題意識、主要概念と分析枠組の提示。
- 2章——日本・韓国・マレーシア・ブラジルで構造転換を牽引した産業に着目し、産業政策の役割を翻訳的適応と内発的学習の視点から考察。産業政策が学習・革新・構造転換にどのように貢献したかを、本書の主要概念と関係づけて分析。

「開発を学ぶ」取組

- 3章——明治政府の国家指導者や政策立案者が打ち出した工業化ビジョンと国家の学習プロセスの関係を考察、途上国の政策学習への示唆を導く。
- 4章——戦後復興と高度成長期に、海外から技術・知識を導入して産業政策を立案・実施する際に通産省と民間(企業・業界団体)がどのように協働して学習したかを分析。
- 5章——日本が米国から生産管理手法を学び、民間主導で国民運動を展開して自国に普及させた経験、およびシンガポールが日本の協力のもとで、政府主導の国民運動を興し、自国流のやり方で社会に普及させた経験を紹介。

「開発を伝える」取組

- 6章——政策学習プロセスを支援する産業政策対話に焦点をあて、アルゼンチン・ベトナム・エチオピア・タイとの知的協力の4事例を紹介、共通する特徴と各事例の固有性を考察。
- 7章——ベトナムの公的TVETが産学連携の諸外国モデルを研究したうえで、日本の訓練プロセス管理手法を選択、日本の協力のもとで自国流に適応させたプロセスと課題を分析。
- 8章——日本への元留学生・研修生が設立したタイの技術振興・技術教育機関が、日本式ものづくりを学び、自国流に普及させた経験を分析し、日本の産業協力の役割を考察。
- 9章——JICAの二国間協力によるアフリカにおけるカイゼン普及支援、およびAUDA-NEPADと共同でカイゼンを広域展開している取組を翻訳的適応の観点から分析。
- 10章——JICAの10年間にわたるチュニジアとエチオピアへのカイゼン支援の成果を比較し、その持続的発展に重要な要因と今後の課題を整理し、開発協力のあり方を考察。

変化する世界における翻訳的適応アプローチ

- 11章——工業化の新潮流を概観したうえで、急速な変化に直面している自動車産業を事例に、途上国や日本の未来の産業開発協力に向けた示唆を考察。
- 終章——本書の分析から得られた示唆を整理し、「共創」の時代における翻訳的適応アプローチの有効性を考察、日本の開発協力の高度化に向けて提言。

得られた示唆：産業開発の取組

- 産業開発のために途上国が重視すべき点として、
 - ①産業実態に基づく、現実的な工業ビジョンの形成 🖐️ 3章、4章
 - ②水平的施策と垂直的施策（産業別）の組合せ 🖐️ 2章、4章、6章
 - ③政策学習（政府）と社会的学習（民間）をつなぐ産官学連携 🖐️ 2章、4章、7章、8章、10章
 - ④社会的学習における国民運動の促進（マインドセット変革） 🖐️ 5章
 - 日本の産業開発・開発協力の特徴として、
 - ①「中身」思考（産業構造や個別産業に着目） 🖐️ 2章、4章、6章
 - ②試行錯誤を支えるハンズオン支援、現場重視 🖐️ 7章、9章、10章
- ⇒ 各国固有の「中身」に寄り添い、プロセス志向を重視する翻訳的適応と親和性

得られた示唆：翻訳的適応を可能とするために

- ❑ 「開発を学ぶ側」の意欲と主体性 🖐️ 2章、3章、4章、5章、6章、7章、8章、9章、10章
- ❑ 体系的かつ実践的な学習方法（「学び方を学ぶ」） 🖐️ 6章、7章
 - 適切なベンチマーク事例の選定、国際比較の視点。小さな成功体験の積み重ねによる能力開発
- ❑ 政策学習や社会的学習における動態的な能力開発 🖐️ 3章、7章、8章、10章
- 「開発を伝える側」の姿勢 🖐️ 6章、7章、8章、9章、10章
 - ベストプラクティスだけでなく、選択肢の提示。主体的に試行錯誤できるプロセスを重視
 - 現場主義は重要だが、政策レベルの連携が不十分だと制度化・普及が課題に。政策対話と具体的協力の組合せは有用

変化する世界の中の翻訳的適応： 変わるもの、変わらないもの(11章、終章)

□ 変わるもの(デジタル化・脱炭素化・地政学的リスクなど)

- 産業政策の対象範囲が拡大、複雑化(持続可能性・包摂性・強靱性の重視、AI・ICTや金融サービスなど他分野との連携)、施策内容や優先順位の変化？
- 多角的・統合的なアプローチと迅速な政策形成・実行が不可欠。政府の組織・機能の見直し(縦割りからの脱却)

■ 変わらないもの

- 自国企業と人材の能力強化
- 政策学習、産官学連携、動態的な能力開発
- 多様なアクターによる社会的学習の重要性
- 翻訳的適応の視点は、過去の経験を現在・未来に応用するうえでも貴重

産業開発協力の高度化に向けて(提言)

1. 知識協力の再評価・拡充

- 日本は「開発を学び、伝える」方法論を体系的に提示する力を強化すべき。各国のベンチマーク事例を比較し、**成功の共通要素 × 国ごとの固有性**を理解するプロセスづくり。
- 政策採用には相手国政府(特にハイレベル層)との関係構築と**政策対話**が重要。
- 新興ドナー諸国との知識協力の強化も(以下、**3.**)。

2. 協働・共創型の協力の推進

- **共同学習**(learning by doing) → **共創** → **共同努力**の促進(facilitation)という協働プロセスを重視。ただし、共に考え、試行錯誤する協力にはリスクテイクが不可欠。

3. 卒業国・知日人材のネットワーク強化、プラットフォーム構築

- 知日・親日人材は、日本の経験を自国に翻訳的適応できる貴重な担い手。
- 制度・予算・人材を整備し、彼らを体系的に動員・共創するプラットフォームを構築する。

最後に(終章より)

- ❑ 「枠組」思考は普遍的で、変わらない原則を求める姿勢。「中身」思考は多様な社会に対して翻訳していく姿勢、変わりゆく社会の中で変化を追いかける姿勢といえるのではないか。
- ❑ 政策の実施に対する具体的な課題は、各国の状況によって異なるため、「中身」を重視することは翻訳的適応を重視することになる。
- ❑ 流動化する世界情勢、米国のグローバル関与の弱体化により、途上国にとって自立のための産業開発、国内資源の動員はますます重要。
- ❑ その意味でも、「開発を学び、伝える」経験を途上国のみならず、開発協力パートナーとして台頭した新興国にも共有し、協力の質を向上させていくことは一層重要ではないか。

ご清聴ありがとうございました！

ご関心ある方は、以下もご覧ください。

【研究プロジェクト】

「日本の産業開発と開発協力の経験に関する研究：翻訳的適応プロセスの分析」

https://www.jica.go.jp/jica_ri/research/strategies/20190724-20240331.html

【英語による紹介ビデオ】

ブックトーク: “Introducing Foreign Models for Development” (14 min.)

<https://www.youtube.com/watch?v=55dSlySSS74>

対談: ニコライ・ムラシキン氏 x 大野泉 (30 min.)

https://www.youtube.com/watch?v=8u0_7clavp0

